

○ 嶋岡暢希（高知女子大学） 岸田佐智

### はじめに

免疫学的効果や母子関係の確立、経済性、児の成長発達、疾病の罹患率の低下などから母乳による育児の利点が見直され、推奨されている。しかし、激しい母乳信仰により母乳を与えられない母親や母乳分泌の少ない母親は自責の念や罪悪感を抱くこともある。今回は母乳栄養に関するアンケートの自由回答覧に記載されたものをデータとして、育児をしている母親が母乳に関してどのような評価をしているのかを明らかにすることを目的として本研究を行った。

### 研究の問い

育児をしている母親は母乳をどのように評価しているのだろうか。

### 研究方法

A 市保健センターの協力の下、平成8～9年にかけて A 市で出生し産後2～12ヶ月の時期にある2,774名を対象に、看護の質の評価の枠組みを用いた母乳栄養に関する実態及びその影響要因についてのアンケート調査を行った。研究の趣旨、及び参加協力は自由であることを説明した依頼文書を同封し、返信は無記名とした。返送数は1,042であった。本研究では、アンケート中にある母乳栄養に関することや受けた援助、印象に残っている対応などについての自由記載欄に回答があった575件のうち母乳に関する評価にかかわる111件をデータとし、質的に分析した。

### 結果（表1参照）

#### （1）母乳についての気付き

これは、母親が母乳育児を行ったり、母乳について考えることから、何らかの気付きを得ることである。この気付きには母乳が出る自然なプロセス、母乳分泌を促す方法についての気付きや、母乳にかかわる体験を通した育児に対する心構えの気付きがあった。これらは、育児を実際に経験することで知識として得られることだけでなく、母親としての心構えや育児観にもつながっている。

#### （2）母乳により力を得られた

これは、母親が母乳を与えるという行為から自然とわいてくる幸福感、母乳育児を続けたことで得られた満足感や達成感など、母乳によって力を得られたことである。母親は母乳育児を通して肯定的な感情を抱き、自分にとって良かったと評価していた。この評価から母親は自分自身がしてきた育児に対する自信や精神的な安定を得、それが育児をしていく上で重要な力となっている。

#### （3）母乳に対する予想と現実の不一致感

これは、母乳を試みたけれども、予想よりもうまくいかなかったプロセスの体験、母乳を続けるための支援が得られなかった体験、母乳の利点と言われているものと当てはまらなかった思いなどから、予想あるいは期待と現実との不一致感を抱いていることである。児への栄養方法について、自分のとった方法や、そのプロセス、母乳栄養を行った結果について母親は納得しておらず、反省や後悔、わだかまりを感じたり、母乳の良さそのものに疑問を感じている母親もいた。

#### （4）母親としての自分を認めてもらえない

これは、母親が周囲の母乳に対する考え方や母親への対応から、母乳育児が上手くいかない、母乳に対しての自分の努力や人工乳で育てている自分の頑張りを分かってもらえないなど、母親としての自分を認めてもらえないという評価をしていることである。母乳の分泌がよくないと自分で思っている母親、仕事の都合や、母乳が出ない状況で人工乳になった母親は、周囲からの人工乳育児の批判を自分の責任と感じ、母親としての自信が揺らいでいた。

母乳についての気付き	母乳は自然なもの	母乳育児に対する予想と現実の不一致感	次は母乳で頑張りたい
	母乳は不思議		できれば母乳にしたかった
	これで母乳が出る		母乳を続ける上での困難
	精神的な余裕が大切		母乳が出なくなりました
	やっぱり母乳		本当に母乳がいの
	人工乳でもいいのでは		母乳は追いつめられる
母乳により力を得られた	母乳で幸せ	母親としての自分を認めてもらえない	どうして人工乳ではいけないの
	子どもが愛しい		母乳に向けて頑張ったことを認めて
	子どもが愛しい		
	母乳で満足		
	母乳は楽しい		
	母乳で大変だったが頑張ったよかった		

表 1. 母親の母乳に関する評価

## 考察

「母乳についての気付き」には、母乳の自然なプロセスや、育児観に関するものなど、母親それぞれに気付きの違いがあった。気付きの内容は異なっているが、母親はこの気付きにより、自分の体や精神的な側面をより理解し、自分自身の育児スタイルを確立することにつながっていると考えられる。また「母乳により力を得られた」という評価をした母親は、自分に自信がもてる体験や、母親として成長したと思える体験をしてきたと考えられる。心理的ストレスのある母親ではオキシトシンの分泌が低下するという報告がある。つまり、母乳により力を得られたという評価ができている母親は、育児をする上での原動力を得ることができており、心理的な活力から良好な母乳分泌につながっていると予測できる。

一方、「母乳に対する予想と現実の不一致感」として評価した母親は、結果的に母乳育児が上手くいかなかったことを自分の知識不足や努力不足としてとらえ、母乳を続けることに心身共の苦痛を体験していた。「母親としての自分が認めてもらえない」と評価した母親は、母乳育児に対するわだかまりを持ち続け、人工乳になったことで自信をもって育児を続けていくことに精神的な重圧をかかえていることが明らかになった。

これらから、出産前から母乳育児についての知識を提供し、その母親がどのような育児を期待しているのか、それが実際にうまくいかなかった場合にも、母親としての自信を保ち、育児に向かうことができるような援助が求められているといえる。